



高杉晋作所用の甲冑、特別公開

9月13日、萩市民から、博物館資料として展示等に役立ててほしいと、高杉晋作所用の甲冑(周布政之助が晋作に贈った甲冑)が萩市に寄贈されました。高杉晋作が実際に使用したことが分かっている甲冑は二領しか現存しておらず、そのひとつとして貴重です。

高杉晋作着用 of 甲冑

萩博物館蔵(大谷和雄氏寄贈)

文久3年(1863)3月、京都で剃髪して「東行」と号したさい、藩重役の周布政之助から贈られた、実戦向けのシンプルな豊具足(重量は全部で約7キログラム)。同年6月、奇兵隊を結成したさい、馬関(下関)の陣中で着用していたことが史料「馬関攘夷従軍筆記」から分かる。奇兵隊といえば近代的な軍隊というイメージが強いが、当初はこのような旧時代のものも使っていたのだ。奇兵隊総督を辞した晋作は政務座の仕事に専念するようになり、同年11月、周布に返却された。



いまから150年前の夏、晋作の汗をたっぷり吸い込んだと思われる甲冑である。

甲冑の裏布

萩博物館蔵(大谷和雄氏寄贈)

高杉晋作が周布政之助から贈られた甲冑の裏布部分(もとは胴部分の内側に張られていたが、旧蔵者がはずしたもの)。周布から晋作に贈られ、また周布に返されて、その子昌三郎に譲られた経緯が記されており興味深い。晋作はこの甲冑を着て「関東」で「勤王の戦」を起こして死ぬのだと述べている。幕府との戦いを決意し、「東行」と号していたことがうかがえる。



「西海一狂生東行高杉春風」(晋作筆)

「長州 周布政之助藤原兼翼」(周布筆)

「予断髪将東趣関東、政之助以此甲冑贈予、々即欲着此以討死於 勤王之戦也、東行自題」(晋作筆)

「後東行此還附政之助、政之助譲与其子昌三郎」(周布筆)